

## 都市部における「学びの場」での「探究のプロセス」に着目した指導方法と教材の開発

醍醐 身奈 (慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員)

### 1. 研究の背景と目的

2022年度から高校では、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」へと名称が変更され、探究学習はこれまで以上に学校や地域で組織的・体系的に行っていくことが求められている。しかし、探究学習の指導体制が確立している学校は少なく、今回の新型コロナ禍の影響を強く受けた都市部では特に、子供たちが地域の人々と交流する機会が大幅に減ってきている。このことは、担い手不足が懸念される地域の伝統文化産業や地場産業にとっても深刻な問題である。

本研究では、現状の課題を踏まえた上で ICT を積極的に活用しながら、特に都市部の学校や地域では取り組みにくい、中・長期型探究学習プロジェクトを行うことによって、子供たちに①地域における「学びの場」の提供すること、②「探究のプロセス」を「文章化」・「見える化」する指導方法と教材を開発すること、この二つを主な目的として研究を行った。

### 2. 研究方法

①「学びの場」の提供：都市部の一拠点として東京都を研究対象地域に選び、特に、研究代表者が所属している「みらいのまちをつくる・ラボ」がある品川区に焦点をあて、子供たちが地域の課題解決を図る探究学習プロジェクトを立ち上げた。

①-1：まち歩きプレ調査 学生と児童がまちを実際に歩き、地域課題の発見プロセスを探る(ノート、インタビュー)

①-2：地元小学校でのオンライン出前授業 授業を通じてどのような発見があったのかを調査(アンケート調査)

②「学びを「見える化」する教材の開発：小学生から高校生が、オンラインで異年齢・異学年の人たちと繋がることのできる「学びの場」として、「KIDA PROJECT ～江戸の伝統技術で、未来の東京をデザインする～」を立ち上げた。これを通じて子供たちが江戸の伝統文化について探究学習をし、最終的に職人や企業の方々に向けて伝統工芸の技術をいかした新商品を提案するところまでを記録した。「見える化」する教材として、「振り返りシート」、「プレゼン資料」、「Photobook」を活用し、子供たちの学びのプロセスがどのように変容していったのかを文章や画像、映像などを基に調査を行った。

### 3. 研究結果及び考察

本研究の成果としては、仮説に基づく以下の結果が実証できたことである。

① 児童・生徒が自律的に探究に取り組み、資質・能力を伸ばすためには、「振り返りシート」やプレゼン資料、Photobookなどの作成を通じて、写真や文章を使って自己の学びを「文章化」・「見える化」することが必要であること。

→ 「振り返りシート」：学びの初期段階では、書く内容も表面的なものが多かったが、振り返りシートへの記入が習慣化してくるとイラストや具体的なコメントが入るようになり、探究すべき内容が焦点化され、深まる様子がうかがえた。

② 児童・生徒の探究的な学習への意欲が高まると、既存の知識やスキルだけでは物足りなくなり、より専門的で深い学びを自ら求めるようになること。

→ KIDA PROJECT を通じて、子供たちがプレゼンに参加して下さった職人さんや企業の方々から直接アドバイスをもらい、自己の学びをより深めようとする行動(別イベントで職人に会いに行く等)に繋がったケースが複数でみられた。

③ 「探究学習」を支える教科横断的な学習システムやアクティブ・ラーニングを取り入れ、地域と連携して学校以外の「学びの場」をつくることが重要であること。

→ 本研究では、地域の課題(伝統文化を受け継ぐ、ゴミ問題、環境問題など)について解決していくためには、様々な教科横断的な学びが必要であることを子供たち自らが気づき、オンラインによる相互ディスカッションや出前授業、プレゼンテーションなどを通じて、学生や専門家に質問したり、調べ学習を行う等、主体的に探究する子供が増えた。

### 4. 今後の課題

本研究では、新型コロナウイルスによる影響で、子供たちには自宅からオンラインで探究学習プロジェクトに参加してもらうことになり、PC やタブレット等を所持し、かつネットワーク環境が整備されている、(特に小学生の場合は)保護者がサポートできる環境にある等、参加できる対象者が限られてしまった。今後の課題は、地域住民や学生サポーター等の協力を得て、子供たちが自宅以外でもオンライン学習ができるような、新たな「学びの場」づくりを検討していくことである。